（要約版）

嗜好品としての漢方茶の顧客価値の探求

申請者　金間大介（金沢大学融合研究域融合科学系教授）
共同研究者　佐々木陽平（金沢大学医薬保健研究域薬学系）

1. 研究目的

かつての日本の中山間地域の産業であった薬草生産は、現在、採算が見込めない状況にあり、次々と生産地が消滅しつつある。このことは、現在の漢方薬の市場が医療保険適用に過度に偏っていることに原因がある。この市場では、漢方エキスメーカーや薬局は、薬価内に収まる生薬、つまり品質よりも価格で選ばなくてはならない（飯田，2001）。必然的に、日本の生産者は中国産との価格競争にさらされている。

本申請者および共同研究者が考える解決策は、現在、市場が小さい医療保険非適用製剤の使用を拡大することができれば、少なくとも良品は高価格という一般的な市場原理の俎上にのせることができるというものである。この市場では、安全安心な国産生薬を適正価格で使用することができ、生産者消費者ともにメリットがある。

このような背景と問題意識を踏まえ、国産生薬の非薬用部位の有効活用方法を探求し、国内の生薬生産・販売の道筋を明らかにする。本研究では非薬用部の有効活用例として、嗜好品としての漢方茶を取り上げる。漢方茶は生薬と茶葉との混合茶であり、その消費実態や消費者が知覚する顧客価値、生産者の購買に向けられた活動等、多くのことが依然として不透明なままである（水島，2019）。そこで本研究では、嗜好品としての漢方茶に焦点を当て、価値創出から伝達、知覚までを一体として考究する。

2. 研究方法

本研究では上記の目的達成のため、地域に埋もれているこれらの資源の活用方策や付加価値を高めるための戦略を検討する。このような地域資源を生かした製品開発の取り組みは農業をはじめとした地域産業の振興が期待できる。今回の当帰等の普及と市場拡大については、市場調査をふまえ、漢方薬の原料としての可能性だけでなく、食品や化粧品などあらゆる角度から需要創出へ向けた可能性を検討する。その上で、事業者とともに新製品の開発を行い、国産生薬を広く社会に普及させていくことを目指す。

3. 成果と考察

（1）漢方薬の原料以外の可能性の検討のための市場調査

生薬や漢方について消費者が抱えるイメージを明らかにするため、使用したことがある／使用してみたい製品や健康維持のために行っていることなどを項目に、Google　form で 84 名に対してアンケート調査を行った。ここでは、漢方や生薬に関する商品について、使

用、体験したことがあるものを全て選択してもらった。中でも医療機関やドラックストアで販売される漢方薬やサプリメントが大きな割合を占めた。

（2） 試作品開発・事業化

上記の調査結果をもとに、地域における国産生薬を用いた新製品を開発した。製品開発の構想段階では、漢方茶、入浴剤、化粧品への応用を検討した。その中から、最終的に本申請者の研究室に知見が蓄積している漢方茶（漢方紅茶）を選定した。消費者に向けて製品コンセプトや試作品の提供を行い、消費者の体験価値の創造と向上に努めることで、消費者視点の国産生薬を用いた製品の価値を探求した。

結果として、様々な漢方茶の飲用シーンを想定して、そのシーンにあった漢方茶をイメージした、風味の異なる 4 種類を開発した。風味のイメージから試作品名を春、夏、秋、冬とした。これらは全国から厳選した 5 種の国産紅茶と 16 種の国産生薬（非薬用部）を使用している。完成した試作品の風味や特徴は以下のようになった。

春は国産紅茶としては珍しいカフェインレスの紅茶に、枝葉によい香りがあるクスノキ科のウショウ、チンピを 1 年以上乾燥させた陳皮、ダイダイカなど計 6 種をブレンドした。フラワリーな優しい香りと柔らかな味わいの紅茶となった。夏は緑茶品種で製造された日本ならではの国産紅茶と、爽やかな香りで親しまれているチンピ、レモンピール、カンキョウなど計 6 種をブレンドした。柑橘系のすっきりとした風味で、目でも楽しめる色鮮やかな紅茶となった。秋はコクのある国産紅茶に、日本各地に自生するマメ科のサンペンズ、朝鮮人参や高麗人参とも呼ばれるオタネニンジンなど計 5 種をブレンドした。焙煎された香ばしい香りとほっこりする味わいの紅茶となった。冬は渋みのある海外紅茶に近い国産紅茶と、セリ科の強い香りを持つトウキハやケイヨウ、ナツメなど計 6 種をブレンドした。そのため、少し癖のあるスパイシーな香りと深みのある紅茶となった。

茶葉				
試作品				
イメージ	不安なとき、夜寝る前に	もやもやを晴らしたいときに	いつでもお茶感覚で	疲れを感じ始めたときに
漢方の解釈	気滞（不安になりやすい）の人へ、気を巡らす	気滞（不安になりやすい）の人へ、気を巡らす	水滞（むくみやすい）の人へ、水を巡らす	瘀血（手足が冷えやすい）の人へ、血を巡らす
風味	紅茶 ←→ 生薬			
カフェイン	ほとんどない ←→ やや強い			

飯田修(2001)「日本における薬用植物栽培の現状と課題」日本作物学会紀事，70(3)，463-464.
水島智史(2019)「茶材としてのハトムギ，レモングラス，ラベンダーおよびステビアの嗜好調査」北陸作物学会報，54，11-13.